

教育環境改善 プロジェクト 確かな学力のために

▶▶ 16

イザーを務める 赤堀侃司・東京工業大学教育工学開発センター 教授が同校を訪問した。同教授はパナソニック教育財団常務理事でもある。



「ICTや情報メディアの活用から新たなカリキュラムづくり」を大塚教諭らに示唆する赤堀・東工大教授(手前)

新潟・上越市立城北中学校

新潟県上越市立城北中学校(中野敏明校長、生徒482人)は、パナソニック教育財団の実践研究助成で「人間力の育成のためのカリキュラム開発」を研究テーマに、特別研究指定校として本年度から2年間の助成を受けている。同財団では「人間力の育成」にICTなどの効果的活用を絡めたテーマは、取り組む学校にとって難しいことも当初予想したが、重要な課題と考え設定した。このテーマの下で同校が設定した研究課題は「地域と進めるキャリア教育」。4年前から取り組んで

夢、希望など題材に演劇公演

「地域と進めるキャリア教育」の一環で

いる課題だが、その基本方針は、自分の将来に夢を持ってもらい、自分を見つめ、主体的に活動する能力や態度を養うこと。人間関係の形成、情報活用、将来設計、そして意思決定という4つの能力の育成を目指す。

この方針に沿い開発に取り組むカリキュラムは「教科・道徳・特別活動・総合学習の

この日、地域交流活動カリキュラムの一つである青少年演劇集団「スタートライン」の公演が行われていた。この演劇集団は、地域住民で

来への希望を抱いてゆくと、いうストーリー。公演後には、全員で「子どもフォーラム」を開き、自分たちの学校自慢や学校を良くする方法をめぐって意見交換した。

赤堀教授は「城北中と地域との関係を見て、かつて地域社会が機能していた時代を懐かしく思い返した」との感想を漏らしていた。研究代表者の大塚啓教諭は「地域の大人や子ども同士がかかわり合う中で、演劇や子どもフォーラムなどの活動を、本校がキャリア教育で目指す4つの能力と関連付けた展開をしていく



歌ありダンスあり、笑い誘う演技に、集中して見入る子どもたち

特別研究指定校編

②

11月上旬、財団が助成する実践研究のアドバ

統合カリキュラム」と「地域交流活動カリキュラム」との2本立て。前者は、1年生による店舗経営の疑似体験、2年生の連続5日間の職場体験学習などの実施、後者は地域ボランティア活動や地域参加型の活動の積極的展開を柱にしている。こうしたカリキュラムの展開のゴールは、保護者、学校、地域が融合した「スクールコミュニティ城北」の創出。同校の教育の基盤を築くことが目的だ。

もある同校OBが平成8年、学校、家庭、地域が一体で進めていた「いじめ根絶」の一環として、当時の3年生と語り、立ち上げた。公演には同校を卒業した高校生、教員を目指す上越教育大の学生らが協力し、同校生徒のほか、校区内の小学校3校の6年生全員が観劇に訪れた。

公演時間は2時間。城北中学校を舞台に、野球部やチャリーダー部の生徒たちが友情や夢に悩みながらも、教師や地域の大人たちとのかわり

本連載、過去の記事は、日本教育新聞コミュニケーションサイト「先生解決ネット」(<http://www.kyoiku-press.com>)もしくは、パナソニック教育財団HP(<http://www.pef.or.jp>)から閲覧できる。

◇この連載は、(財)パナソニック教育財団 (URL=<http://www.w.pef.or.jp>)と助成先の協力により実施しています。

次回は8日付に掲載